

2023 年における世界の食料需給見通しのポイント

平成 26 年 10 月 10 日

農林水産政策研究所

1. 世界食料需給モデルの概要

(1) 「世界食料需給モデル」は、将来における人口増加率や経済成長率について一定の前提を置き、価格を媒介として各品目の需要と供給を世界全体で毎年一致させる「同時方程式体系需給均衡モデル」であり、約 6 千本の方程式体系から構成されています。

(2) 世界食料需給モデルによる 2023 年の見通しは、以下の前提に基づき、各国政策の変更や今後の気象変動の影響等を考慮せず、天候が平年並みに推移した場合の中長期的な予測（ベースライン予測）です。

- 主に途上国における世界人口の増加（国連の予測「World Population Prospects : the 2012 Revision」に基づき、2023 年の世界人口を 79 億人と推計）
- 新興国等を中心とする世界の経済発展（実質 GDP は世界銀行「World Development Indicators 2013」、実質経済成長率は IMF「World Economic Outlook 2013」に基づき、世界平均の 1 人当たり実質 GDP が、約 7.6 千ドル（基準年：2010-12 年の 3 か年平均）から約 9.9 千ドルに約 30%上昇すると推計）
- 所得向上に伴う畜産物等の需要増
- バイオ燃料向け農産物の需要増（米国・ブラジル等のバイオ燃料の目標使用量が継続することを前提）

2. 2023 年の見通し（予測結果）のポイント

中長期的には世界経済の成長が緩やかになると見込まれることから、農産物需要の伸びはやや鈍化するものの、総人口の継続的な増加、所得水準の向上等に伴う新興国を中心とした食用・飼料用需要の増加に加え、バイオ燃料原料用需要の下支えも要因となり、農産物需要は増加が見込まれる。一方、供給面では、穀物等の生産が、主に単収増により増加すると見込まれるものの、需要が供給をやや上回る状態が継続し、食料の国際価格は高値圏で推移する見通し。

- (1) 穀物（小麦、とうもろこし、米、その他穀物の合計）の消費量は、世界全体で基準年から約 4.3 億トン増加し、2023 年には約 26.8 億トンに達する見通し。小麦及びとうもろこしは、食用需要よりも飼料用需要の増加率が高い見通し。
- (2) 小麦については、中南米、中東、アフリカの各地域で、生産量が 2 割以上の大幅な増加となるものの、消費量の増加がこれを上回り、純輸入量が増加する見通し。一方、2023 年には、ロシア、ウクライナの純輸出量の合計が、現在最大の輸出国である米国を大きく上回る約 32.6 百万トンに達する見通し。
- (3) とうもろこしについては、近年純輸入国に転じた中国が、2023 年には純輸入量を約 13.6 百万トンまで増加させる等により、アジア地域全体の純輸入量が 34.6 百万トン（基準年）から、2023 年には 50.5 百万トンまで約 46% 増加する見通し。
- (4) 大豆についても、世界最大の輸入国である中国において、引き続き消費量が増加することから、純輸入量が 57.4 百万トン（基準年）から、2023 年には 67.3 百万トンまで約 17% 増加するものの、主にアルゼンチン、ブラジル等中南米で増産され純輸出量が 45.8 百万トン（基準年）から、2023 年には 68.2 百万トンまで約 49% 増加する見通し。
- (5) 肉類については、世界全体では、1 人当たりの消費量が 37.5kg（基準年）から、2023 年には 41.4kg まで約 10% 増加する見通しであるが、主に中国、インドなど相対的に経済成長率の高いアジアで、28.5kg から 34.8kg まで約 22% 増加する結果、2023 年のアジアの純輸入量は、牛肉で 1.8 百万トン、豚肉で 5.2 百万トン、鶏肉で 5.2 百万トンに達する見通し。
- (6) 穀物及び大豆の国際価格については、基準年と比較して 2023 年には、実質価格で 0～6% 上昇、消費者物価の上昇を考慮した名目価格で 29～34% 上昇する見通し。経済成長による需要の伸びが大きい、植物油、鶏肉、バター、脱脂粉乳の実質価格は、穀物及び大豆より高い割合で、11～30% 上昇する見通し。